

## バレンボイムがヨーゼフ・シュトラウスの195回の誕生日を祝う

若宮 由美 (op.257)

バレンボイムは2022年10月に80歳になります。ピアニストとしてだけでなく指揮者として1966年にデビュー。ウィーン・フィルのニューイヤー・コンサートには3度目の登場となります。コロナでロックダウンした後、初めて同楽団を指揮したのも彼でした。そして2022年はヨーゼフ・シュトラウスの195回目の誕生日です。ヨーゼフに乗せて新年がスタートします。

### ヨーゼフ・シュトラウス：〈フェニックス行進曲〉 op.105

#### Josef Strauss: *Phönix-Marsch*, op.105

「フェニックス」とは滅の精神を指します。作曲契機はヒーツィングに新しいテーマパーク「ノイエ・ヴェルト」が1861年5月20日に開園したことです。園内に足を踏み入れると、庭園の中にはチューリップなどの花が植えられ、夜になればガラスで作られたチューリップ型の火がともされ、ゲストハウスには数千人が祝祭や演奏会に親しみました。

### ヨハン・シュトラウス2世：ワルツ〈フェニックスの羽ばたき〉 op.125

#### Johann Strauss (Sohn): *Phönix-Schwingen*, Walzer, op.125

ヨハン2世は1852年のドイツ旅行の後は死亡記事が用意されるほどの状態になりました。1853年になると健康を回復し、1月16日にフォルクスガルテンに登場し、翌日のゾフィーエンザールでの舞踏会で、この曲を快気祝いとして演奏しました。不死身をイメージしたのか、それともウィーンでフィアカーよりも安い「フィアカー交通」の名から題名を頂いのかはわかりません。ただ、楽譜の表紙にはこの乗り物が描かれています。

### ヨーゼフ・シュトラウス：ポルカ・マズルカ〈海の精セイレーン〉 op.248

#### Josef Strauss: *Die Sirene*, Polka mazur, op.248

1868年6月19日に兄弟はフォルクスガルテンで新作の祝祭を催します。ヨハン2世はワルツ〈ウィーンの森の物語〉op.325、エドゥアルトはポルカ・フランセーズ〈標語〉op.40を披露。ヨーゼフはウィーンでは未発表のオペラ《ニュルンベルクのマイスタージンガー》から3曲を演奏し、自作としてシュネル・ポルカ〈急がば回れ〉op.247とこの曲を初演。

### ヨーゼフ・ヘルメスベルガー：ギャロップ〈小さな広告〉 op.4

#### Joseph Hellmesberger: *Kleiner Anzeiger*, Galopp, op.4

ヘルメスベルガーは一時期ウィーン・フィルと関係がありました。この作品は1876年2月22日にウィーンのジャーナリストと作家の「コンコルディア協会」の舞踏会で初演。謝肉祭の中で「お気に入りの作品」となり、シュトラウス兄弟に比肩するようになりました。

### ヨハン・シュトラウス2世：ワルツ〈朝刊〉 op.279

#### Johann Strauss (Sohn): *Morgenblätter*, Walzer, op.279

1864年、「コンコルディア協会」はヨハン2世だけでなく、オペラ《ラインの水の精》のためにウィーンに来ていたオッフエンバックにもワルツの提供を要請しました。フランスのオッフエンバックは賢明にワルツを仕上げますが、ウィーンのワルツの発展に疎かった

せいで、父ヨハン・シュトラウス 1 世風のワルツになり、1 月 12 日の当日、オッフエンバックはゾフィーエンザールに姿をみせませんでした。シュトラウスは同ワルツに題名を付かなかつたので、オッフエンバックのワルツ〈夕刊〉と対比させて、〈朝刊〉と名付けられました。舞踏会前の新聞広告では〈音楽の至急便〉という題名で広告されています。

### エドゥアルト・シュトラウス：ポルカ・シュネル〈ちょっとした記録〉 op.128

#### Eduard Strauss: *Kleine Chronik, Polka schnell, op.128*

1875 年 2 月 1 日にゾフィーエンザールのコンコルディア舞踏会でエドアルトの指揮で初演。「Kleine Chronik」はウィーン新聞のコラムの名前で、政治的でなく、たいてい芸術的な寄せ集めの記事が載せられました。ポルカ・シュネルは 2 拍子系のテンポの速いポルカ。

### ヨハン・シュトラウス 2 世：オペレッタ《こうもり》序曲

#### Johann Strauss (Sohn): *Ouverture zu Die Fledermaus*

ウィーン・オペレッタの「金の時代」の頂点をなす《こうもり》。1874 年 4 月 5 日の復活祭の日曜日としてアン・デア・ウィーン劇場で作曲者の指揮により初演されました。短期間で作られたとは思えない出来栄で、序曲からも舞台上で繰り広げられる華やかな舞踏会やシャンパンに酔いしれる人びとの姿が目に浮かぶようです。

### ヨハン・シュトラウス 2 世：音楽の冗談〈シャンパン・ポルカ〉 op.211

#### Johann Strauss (Sohn): *Champagner-Polka, Musikalischer Scherz, op. 211*

1858 年 7 月 31 日（ロシア暦 8 月 12 日）にロシアのパヴロフスクで初演。「酒の王者シャンパン」がヨハン 2 世は大好きでした。このポルカには「音楽の冗談」という副題がつけられ、陽気な舞踏会で勢いよくシャンパンの栓が抜かれる様子が描写されます。曲の途中で、古い流行歌〈金があろうとなかろうと、おれにはどっちも同じこと〉が金管楽器で奏されますが、これはこの年に施行された不平等な通貨制度を皮肉ったものと考えられています。ウィーンでは 1858 年 11 月 21 日にフォルクスガルテンで初演されました。

### カール・ミヒャエル・ツィーラー：ワルツ〈夜遊び〉 op.466

#### Carl Michael Ziehrer: *Nachtschwärmer, Walzer, op.466*

ツィーラー(1843-1922)のワルツは、1894 年 9 月 30 日にウィーンの娯楽場「ロナッハー」で自らがツィーラー楽団を指揮したプロムナード・コンサートで初演。曲の冒頭で、太鼓の連打と陽気な行進曲の後、ウィーナーリートが聴こえてきます。歌詞はこのワルツの題名に関連するけれども、つきなみなもので、「ねえ、君。どう思う。家に帰りたい、それともここにいたい？夜が明けて、太陽が私たちに笑いかけるよ。ねえ、君。そうしたら家に帰って、私たちに眠らせるじゃないか」と歌います。続けて 3 拍子のワルツが始まります。

### ヨハン・シュトラウス 2 世：〈ペルシャ行進曲〉 op.289

#### Johann Strauss (Sohn): *Persischer Marsch, op. 289*

7 月 11 日（ロシア暦 6 月 29 日）に〈ペルシャ軍行進曲〉を初演。トリオ部分はハーブのソロでここにペルシャの旋律が使われたことから、ロシアのヴェットナー出版社は「ペルシャのための軍楽行進曲」op.288 と題し、「ペルシャのシャー、皇帝陛下」に献呈していま

す。テヘランのシャー、ナジール・アド・ディン（ナーセロッドイーン・シャー）がこれを気に入り、「ペルシャの太陽勲章」をヨハン 2 世に与えました。ウィーンに戻った彼はこのトリオ部分を作り変えました。そこにはグリムカ（1814-57）のオペラ《ルスランとリュドミラ》（1842）の中の第3幕にある〈ペルシャの合唱〉が用いられました。1864年12月4日にフォルクスガルテンで披露されました。

### ヨハン・シュトラウス 2 世：ワルツ〈千一夜物語〉 op.346

#### **Johann Strauss (Sohn): *Tausend und eine Nacht*, Walzer, op. 346**

ヨハン 2 世はオペレッタ作曲家に転身していきませんが、初めて取り組んだ《ウィーンの陽気な女房たち》に難航し、アン・デア・ウィーン劇場の監督であるマクシミリアン・シュタイナーの提案を受けて誕生したのが第 1 作の《インディゴと 40 人の盗賊》です。1871年 2 月 10 日に初演されました。場所が東洋に移されたのに、音楽はウィーンのままという一風変わった作品になり、人気のソプラノ歌手マリー・ガイステインガーがウィーン生まれのファンタスカを演じました。しかし、シュトラウスの伝記作家アイゼンベルクは「ワルツ〈そう、れが私の生まれた街では〉が演奏された時、劇場すべてで歓声が上がり、桟敷席や特等席の人びとは踊り始めた」と書いています。このメロディーを始まりとして、〈千一夜物語〉は作られています。このワルツの初演は、1871年 3 月 12 日エドゥアルト指揮のシュトラウス楽団により楽友協会の黄金ホールで行われました。

### エドゥアルト・シュトラウス：ポルカ・フランセーズ〈プラハへご挨拶〉 op.144

#### **Eduard Strauss: *Gruß an Prag*, Polka française, op.144**

1877 年はヨハン 2 世と妻イェッティは翌年開催される万国博覧会への出演の可能性を探るため、パリに赴いていました。不在の間はエドアルトに委ねられ、この曲は 1877 年 2 月に初演。プラハのドイツ語学生のための閲覧・演説会館の委員会に献呈されています。

### ヨーゼフ・ヘルメスベルガー：性格的小品〈家の精霊〉

#### **Joseph Hellmesberger: *Heinzelmännchen*, Charakterstück**

性格的小品というのは、自由な発想によって作られた作品のこと。「Heinzelmännchen」はケルンの伝説で、小さい家の中のすべての用事を片付ける精霊たちのことをいいます。仕立て屋の妻がエンドウ豆を床に撒いたことに怒った精霊たちは姿を消したという話。短調で書かれた作品はウィーンのヨーゼフ・エーベルレによって出版されています。

### ヨーゼフ・シュトラウス：(ポルカ・フランセーズ)〈ニンフのポルカ〉 op.50

#### **Josef Strauss: *Nymphen-Polka*, (Polka française), op.50**

1858 年 2 月 8 日にシュトラウス家の慈善舞踏会をゾフィーエンザールで開催。その時、ヨハン 2 世がワルツ〈ニースの思い出〉 op.200、〈芸術家のカドリーユ〉 op.201 など 7 曲、ヨーゼフが〈ミュージック・カドリーユ〉 op.46、ワルツ〈時代相〉 op.51 など 6 曲の新作を用意。このポルカはその新作に含まれます。ギリシャ神話によれば、「ニンフ」とは自然界の精のことで、古くから処女神とは対比的な存在、ひいては花柳界を指しますが、ウィーンではそれほどの好色性はなく、夏にこのプールで遊んだ女性たちを思い起こしました。

### ヨーゼフ・シュトラウス：ワルツ〈天体の音楽〉 op.235

#### **Josef Strauss: *Sphärenklänge, Walzer, op.235***

1868年、ヨーゼフ・シュトラウスは医学舞踏会の音楽監督に再任され、1月21日のゾフィー・エンザールでの舞踏会に同曲を献呈しました。通常、献呈曲には主催者と関連のあるタイトルを付す習慣がありましたが、このワルツには医学と無関係のタイトルが与えられました。冒頭の和音の響きはヴァーグナーの影響を受け、兄よりも重厚なオーケストレーションを好んだヨーゼフの手腕が発揮されています。しかし、気付く人はありませんでした。

### ヨハン・シュトラウス 2世：ポルカ・シュネル〈狩り〉 op.373

#### **Johann Strauss (Sohn): *Auf der Jagd, Polka schnell, op.373***

ピアノ初版譜の表紙には、森で狩りをする人びと、猟犬、そして獲物の鹿が描かれています。軽快なポルカは、4作目のオペレッタ《ウィーンのカリョストロ》(1875年2月27日初演)のモチーフで構成されています。オペレッタの話とは関係なく、銃の発砲を合図に「狩り」を楽しむ様子が伺えます。1875年8月5日に「ノイエ・ヴェルト」で開かれた庭園プロムナード・コンサートで、エドゥアルトの指揮により初演されています。